




博士論文審査及び最終試験の結果の要旨

氏 名	鈴木 恵		
論文題目	医療・介護関連肺炎リスク患者の看取りを支援する在宅ケアモデルの開発 —最期まで口から食べることに取り組んだ事例を通して—		
論文審査員	主 査	北 岡 英 子	
	副 査	谷 口 千 絵	
	副 査	生 田 倫 子	

【論文審査の結果の要旨】

日本は現在、超高齢社会で在宅・施設療養高齢者が増加する中、誤嚥などによる予後不良の終末期肺炎発症も増加することが予測されている。そこで本研究は、医学的には「口から食べる」ことを制限されるが、本人・家族は「最期まで口から食べる」ことを希望する者も多いことに着目し、最期まで口から食べることに取り組んだ7事例と医療・介護従事者 26 名へのインタビューを通して、食することへの支援を中心に医療・介護関連肺炎リスク (NHCAP) 患者の看取りを支援する在宅ケアモデルの開発を目的とした。

本研究では7事例(家族)と医師 2 名、看護師 7 名、管理栄養士 4 名、ケアマネジャー 3 名、ヘルパー 3 名へのインタビュー内容を山本(2018)による事例研究法を参考に分析した後、佐藤(2015)の比較継続法にてカテゴリ化を行った。その結果、看取りまでの経過は「食することを制限される時期」「食べられる時期」「食べられない時期」に分類され、各時期における本人の状態や家族の心情、その時期に必要なケア内容がリアルに抽出され、時間的経過とともに変化していく様相が明らかになったことが評価された。

ことに語りにくさを有すると思われる看取りの経験について、参加者らは心情や葛藤を含め素直に語っていること、また在宅での看取り支援を実践している複数の医療・介護従事者からのリアリティ溢れる語りがデータとして得られたことも研究者のインタビュー方法が活かされていることとして評価された。

近年、ターミナル期の支援については研究的取り組みがされつつあるが、NHCAP 患者の看取りを支援する中で「食」、ことに「口から食べること」への支援に着目した研究は見当たらない。その点において本研究は新奇性、独自性があり、看取りまでの過程で「食への支援」に関して一定のモデルを明らかにしたことは、学術的にも、また今後の実践への提言としても意義がある。よって博士学位論文としての水準を満たしていると判定できる。

【最終試験の結果の要旨】

博士論文審査及び最終試験は令和 2 年 1 月 21 日 18 時より行った。冒頭約 20 分で鈴木恵より研究内容の発表があり、その後、主査、副査による口頭試問を行った。

研究に関してはインタビュー対象者やデータ、分析結果に関する質問には的確な回答があり、データを深く読み込み、理解していることが受け取れた。さらに分析やモデルの構築では先行研究や関連文献を参考に、データに基づいた組み立てができていることが確認できた。今後に向けては、研究者自身が受け止めている課題の確認と、課題に向けての取組み、実践への還元について等、明確な回答があり、研究継続への意欲的な姿勢が確認できた。

博士後期課程での学習過程では多くの知識や人との出会いの大切さ、インタビュー方法やデータ分析での苦労や工夫、論文化する困難などの経験から多くの学びを得ており、それらが今後の教育や実践活動での基となるように努力したいという発言があった。また保健福祉の学位を取得する責任をもって、研究成果を実践活動へどう還元していくか、さらに研究継続の意志、人材育成の役割等の抱負を語っていた。

これらのことを総合的に評価し、審査員の全員の一致により最終試験を「合格」とした。